

文学の自律性とその限界

—ペーター・ハントケの“Die Tablas von Daimiel”を手掛かりにして—

服部 裕*

はじめに

(前略) わたしは真実を知らない。しかし、わたしは見、聴き、感じ、想起し、そして尋ねます。そのために今日、わたしはここにいます。ユーゴスラヴィアの近くに、セルビアの人々の近くに、そしてスロボダン・ミロシェヴィッチの近くに¹⁾。

これは、2006年3月18日、セルビアのボジャレヴァツで行われた旧ユーゴスラヴィア連邦元大統領スロボダン・ミロシェヴィッチの葬儀に参列したペーター・ハントケが述べた弔辞の一節である。

ミロシェヴィッチを一方的に旧ユーゴスラヴィア内戦と、モスレムに対する虐殺事件の首謀者と看做していた西ヨーロッパのメディアや言論界が、ハントケのこの行為を見逃すはずはなかった。1996年の所謂「セルビア旅行記」²⁾の発表以降、親セルビア作家というレッテルの下、ハントケに加えられた猛烈なバッシングが再来するまでに時間はかからなかった。

新たなハントケ排斥は、パリから始まった。パリのコメディー・フランセーズの支配人マルセル・ボゾネが、2007年に予定されていたハントケの戯曲“Das Spiel vom Fragen oder Die Reise ins sonore Land”を演目から外したのである。さらには、デュッセルドルフ市が2006年度のハイネリッヒ・ハイネ賞をハントケに授与することを決定すると、同市の議会を構成するほとんどすべての政党や、「フランクフルター・アルゲマイネ新聞」をはじめとするドイツの主要メディアは、こぞってその決定に異議を唱え始める。文学作品に対する文学的批評とはまったくかけ離れた次元で、1996年当時と同じようにハントケ個人への「集中砲火」が始まったのである。(作家ハントケにとってのせめてもの救いは、文学や芸術の関係者のなかから、政治やメディアによる文学への介入は検閲以外の何ものでもないという声が少なからず挙がったことであるが、そうした声を挙げた人々にしても、ハントケがミロシェヴィッチの葬儀に参列し弔辞を述べたことに対してはほとんどが批判的であった。)

結局、ハントケに対する言わば「社会的制裁」は、作家自身がハイネ賞を辞退することで一応の終息を見た。しかし、政治が文学に対して行使する力の意味についてはもとより、文学が政治に対してもちうる可能性について、ハントケを巻き込んだ一連の文化的喧騒が語り尽くしたとは到底言えない。

旧ユーゴスラヴィアの問題が生ずるまでは、意図的に避けてきた歴史的事象との関わりを、

自ら文学的創作に取り込むことによって、ハントケは何を表現しようとしたのか。とりわけハントケ文学を実際に読んだことのない大多数の人々にとっては、明らかに政治的、しかも党派的メッセージ以外の何ものでもないミロシェヴィッチの葬儀への参列という事実が、作家自身の文学的意図との関連において、如何なる意味をもっているのか。そして、その文学的意図は読者、わけても同時代の読者に説得力をもちうるのか。

以下本稿では、主に“Die Tablas von Daimiel”を取り上げることによって、ハントケ文学の自律性と現実の政治との関係について考察を加える。

1. ハントケ文学とユーゴスラヴィア

2005年に発表された“Die Tablas von Daimiel”は、ユーゴスラヴィア内戦勃発以降にハントケが発表してきた一連のユーゴスラヴィア関係のテキストとしては、今のところ最も新しいものである。ちなみに、ユーゴスラヴィア関係のテキストとは次の七作品である：“Abschied des Träumers vom neunten Land”（1991年），“Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien”（1996年），“Sommerlicher Nachtrag zu einer winterlichen Reise”（1996年），“Unter Tränen fragend”（1999年），“Die Fahrt im Einbaum oder das Stück zum Film vom Krieg”（1999年），“Rund um das Große Tribunal”（2002年），“Die Tablas von Daimiel”（2005年）。

改めて各作品の発表年を見てみると、ハントケがユーゴスラヴィア内戦の節目に作品を発表していることがよくわかる。91年はハントケが文学的故郷と看做しているスロヴェニアがユーゴスラヴィア連邦から事実上独立した年で、文学的理想のメタファーとしてのユーゴスラヴィア連邦が事実上解体され始めた年である。ハントケは“Abschied des Träumers vom neunten Land”のなかで、異なる民族が互いに民族の壁を超えて共存する可能性が、スロヴェニアの独立によって失われてしまったと述べている³⁾。

96年はボスニア・ヘルツェゴビナ紛争終結の翌年であり、セルビア悪人説が定着した年とも言える。ハントケは苛酷なボスニア紛争が終結した後、あえてボスニア・ヘルツェゴビナではなくセルビアを二度訪れ、セルビアの人々の日々の生活の様子とセルビアの自然を描写する。それは、西ヨーロッパのメディアが一方的かつ画一的に、すべてのセルビア人を内戦の加害者であると決めつけたことに対する批判を意味していた。ジャーナリストが書こうとしない、否書きえない現実を、文学的に表現しようとする意図が、ハントケをセルビアに向かわせたとも言える⁴⁾。

99年はNATOがセルビアを空爆した年であり、ハントケは空爆下のセルビアを訪れ、上記99年発表の二作品を書いている。ハントケがユーゴスラヴィア内戦およびその崩壊の原罪は「西側世界」にあると確信するに至ったのは、まさにこのNATO空爆下のセルビアを見たことによると考えられる。後により詳しく述べるが、ハントケは2002年のペーター・ハムとのインタビューのなかで、旧ユーゴスラヴィア問題の「罪を背負いこんだのは、訳もわからず、同時に文字通りの報復主義からユーゴスラヴィアを破壊した西側世界だった」⁵⁾と言っている。

NATOのセルビア空爆によって事実上権力を失った旧ユーゴスラビア大統領ミロシェヴィッチは、NATOの圧力の下2001年春に「人道に対する罪」で逮捕・起訴され、7月には

オランダの国連旧ユーゴスラヴィア戦犯法廷に送致される。これ以降、ユーゴスラヴィア問題に対するハントケのテキストは、そのテーマを同戦犯法廷とミロシェヴィッチ個人、ならびにそれを報ずる西側メディアのあり方に収斂して行く。特に2005年“Literaturen”誌に発表され、翌年“Suhrkamp”出版から上梓された“Die Tablas von Daimiel”は、2004年の初夏、ハントケがミロシェヴィッチを個人的にスヘフェニンゲンの刑務所に訪問したときの様子を報告したものである。

以上概観したように、旧ユーゴスラヴィア問題に対するハントケの発言は15年にも及んでいるが、それは終始セルビアの名もなき人々の日常の描写と、その現実から目を背けてきた西側メディアへの批判に貫かれている。つまり、ハントケはそれまで「つねに拒否してきたもの、つまり歴史」⁶⁾に喜んで「巻き込まれた」⁷⁾のである。

とは言え、(多くの西側のメディアや言論人は、ハントケが「ミロシェヴィッチやカラジッチとどんな関係であるのかを知りたいだけ」⁸⁾だったにも拘らず)ハントケは歴史的な事象に対する明確な意識を以て書いた96年の二編の「セルビア旅行記」のなかでは、自らの文学的関心をもっぱら西側世界に見捨てられたセルビアの普通の市民に限定していた。

確かに96年当時のハントケが描写したのは、作家自身の表現を借りると「老哲学者エドムント・フッサールの場合なら(中略)『生活世界』とよばれる彼の三次的なもの」⁹⁾、つまり社会の周縁に生起する人間の日常的な生の営みであった。そこにはミロシェヴィッチやカラジッチという、歴史に名を刻むような人物は登場しない。それがハントケ文学の表現形式の不文律であったのである。

しかるに、ハントケは2002年以降の作品で、かつての権力者であるミロシェヴィッチを文学的メタファーとしてではなく、歴史的な人物として登場させることを厭わなくなる。もとより、作家としてのハントケと個人としてのハントケを分離することなどできないであろう。そう考えれば、ミロシェヴィッチを文学の世界に登場させたことには、何らかの文学的意図があると考えるのが自然である。では、それはいったい何であろうか。それを探るには、ミロシェヴィッチとの対面を報告している“Die Tablas von Daimiel”をより詳しく読み解かなければならない。

2. 文学としてのテキスト：“Die Tablas von Daimiel”

獄中のミロシェヴィッチとの対面をテーマとしたエッセー“Die Tablas von Daimiel. Ein Umwegzeugenbericht zum Prozeß gegen Slobodan Milošević”(『ダイミエルの台地／スロボダン・ミロシェヴィッチに対する裁判のための回り道の証人の報告』¹⁰⁾)は、文学作品として読まれるべきなのか。それとも、多くのハントケ批判者が考えるように、単なる親セルビアの党派的プロパガンダのテキストとして読まれるのが妥当なのか。そもそも既成の文学ジャンルの形式を踏襲しないハントケの作品を、明確なジャンルの枠にはめ込むのは簡単ではない。しかし、作家自身がどのような意図を以て、一つの作品を発表したのかを知ることが可能であろう。つまり、それが文学的意図に基づいたものなのか、党派的な意図が勝っているのかを見極めることである。

その疑問に答えるのに、少なからぬヒントを与えてくれるのは、作品のタイトルである。ハントケの作品のタイトルは、多くの場合、何らかのメタファーを含意している。ある意味、

作品のすべてがタイトルに凝縮されていると言ってもよい。どのようなテキストでも、そのタイトルはテキストの核心を表現したものには違いないが、それがメタファーなのか、それとも単なる要約的キーワードなのかによって、そのテキストがもつ文学的性格の強度は変わってくる。

そう考えると、ミロシェヴィッチとの対面の様子とその裁判についての論評、並びにそれを通しての、主に歴史に残ることのない名もなきセルビア人に関する経験の反芻から成っている作品のタイトルに、セルヴァンテスのドンキホーテでも知られているスペインのラ・マンチャ地方の台地の名前が付されていることには、何か特別な意味が隠されているはずである、という思いが生ずる。

ハントケがラ・マンチャ地方のダイミエルの^{タブラス}台地を訪れた際に、そこで見た失われた風景と案内人のタクシー運転手との会話について記しているのは、約60ページに亘る作品の最後の4ページだけである。その4ページで報告されていることは、拘置所でのミロシェヴィッチの様子や、作家がそこで想起したセルビア訪問時の体験とは、何ら直接的なつながりはない。それにも拘らず、片やスペインのラ・マンチャ地方の今やかつての豊かな自然を失ってしまった台地、一方には内戦に疲弊したセルビアという、互いにいっさい何の連関もない二つの地域が、作家ハントケの文学的想像力を介して直接的に結びつけられ、前者は後者の隠喩として立ち上がるのである。つまり、ミロシェヴィッチとの対面を報告しているこのテキストも、作家自身が文学的性格を付与しようとしたテキストであると理解すべきなのだ。

ダイミエルの台地はセルヴァンテスも描写しているとおり、かつてはグアディアナ川が地中に潜り、また地上に湧き上がることで水の豊富な肥沃な土地のはずだった。それを期待して訪れたハントケが見たものは、「しかし、水も、水車も、小屋も、米も、何もない土地で、あるのは乾ききり、朽ち果てた泥炭から成るひび割れたまろい大地からまばらに生える、ところどころありきたりのステップの草より少しばかり黒っぽい、ただの草だった」(S. 62)。かつて豊かな水を湛えていた台地をそのようにしてしまったのは、「自然や干ばつではなく、『人間』だった」(S. 62)。経済的な理由から耕作地を拡大するために、「グアディアナ川の地中の水源が用水によって吸い取られてしまった。その結果、地表の流れはすべて干上がってしまった」(S. 62)。つまり、「この地のタブラスは、永久に破壊されてしまった」(S. 62)のである。

ハントケは明らかに、人間の手で経済的効率のために破壊されてしまったダイミエルの自然のなかに、第一次世界大戦後と第二次世界大戦後の二度、民族と宗教の違いを克服して建設された多民族国家としてのユーゴスラヴィア連邦崩壊の隠喩を見ている。ダイミエルの台地の破壊に対するタクシー運転手の「苦々しい怒り」(S. 63)は、旧ユーゴスラヴィア連邦の破壊に対する作家自身の怒りと重なる。そして、「わたしから何かが奪われてしまった。いや、わたしだけでなく、わたしたちから」(S. 63; 傍点は引用者による)という運転手のことばは、その怒りが自分独りの喪失感に関わるものではないことを示し、ユーゴスラヴィア連邦の喪失が本来ハントケ個人だけではなく、ヨーロッパ全体に関わっていることの隠喩としての意味を獲得するのである。

ハントケはすでに1996年6月のインタビューで、ユーゴスラヴィア連邦崩壊の意味を次のように解説している：「わたしたちは本当のヨーロッパの基礎を置く機会を逃してしまっ

た」¹¹⁾と。ハントケは自らが思い描く「本当のヨーロッパ」とは、民族や宗教の壁を超えた「寛容と人権のヨーロッパ」¹²⁾であることも明かしている。

奪われてしまったものへの怒りを共有するタクシー運転手に、ハントケは「思わず、そして自分自身の質問に驚きながら、ユーゴスラヴィアのことを尋ねた」(S. 63)。ハントケ自身が書いているように、普通なら、ユーゴスラヴィアのことについて誰かに質問などはしない。それだけユーゴスラヴィア問題に対する理解は西側世界において画一的かつ一方的であり、如何にハントケがこの問題で孤立しているかがよくわかる。それにも拘らず、ある予感を以てハントケは、「普通なら誰にも尋ねなかったであろうし、実際にそれ以来もはや誰かに尋ねることもしなかったし、これから誰にも尋ねないであろう」(S. 63) ユーゴスラヴィアについて、タブラスの喪失を嘆き憤るタクシー運転手に尋ねたのである。

しかし、「自分が質問したその男の答えを、わたしは心のなかにしまっておくつもりだ。もしその答えを予感していなかったとしたら、わたしはきっと彼に尋ねることなどなかったであろう」(S. 64) というように、運転手の答えは読者に明瞭に伝えられることはない。その答えは、所謂西側世界で一般的に流布している、反セルビア的なものではなかったし、ましてや「いつもにやにやした表情」で「ユーゴスラヴィアに対するNATOの人道的戦争の空爆とミサイル攻撃の指揮をブリュッセルでとっていた、彼の同郷人の理解とも違っていた」(S. 63)と報告されているだけである。

ハントケにとって重要なのは、その運転手がどのようなことばでユーゴスラヴィア問題に対する見解を述べたかということより、歴史の表には登場しない名もなき人間のなかには、自らの思いを共有できる人間がまだいるという予感が間違っていなかった、だからこそ書き続けること、つまり文学には意味があるのだという思いを新たにしたことである、と言ったらい過ぎであろうか。

このタクシー運転手とのやりとりが事実なのか、あるいはフィクションなのかを問うことは、あまり意味がないように思われる。本章の冒頭で、このテキストが文学として書かれたのか否かと問うたのは、そのためである。事実に基づいた報告として発表されたテキストだとしても、ハントケの文学的意図を読み取るとすれば、もっとも文学的なのはこの最後の4ページであり、示唆的な表現にとどめられたタクシー運転手の答えにこそ、現実問題に対するハントケの文学的主張が込められているからである。仮にこの最後の4ページ以外の部分は事実に基づいた報告であり、この最後の4ページの描写だけが多分にフィクションを織りまぜているにしても、そのことが読者にとって（また作者自身にとっても）このテキストを不誠実なものにしているとは言えない。なぜなら、このテキストもまた文学的創作であるからである。

3. 「回り道をする証人」の「証言の書」

ハントケが言わばセルビアの人々と彼らのかつての指導者であったミロシェヴィッチのために、このテキストを文学として書いたこと自体が非難される必要はない。文学的表現は、どこまでも自由であるからである。しかし、この自由な文学的創作が成功作かどうかは、また別の問題である。さらに、何を以て成功作、あるいは失敗作と看做すのか？ その疑問に対して答えるにも、かなり複雑な思考を要し、一義的に答えることはできないであろう。

仮に読者による作品の受容を最重要な前提と措定したとしても、それが文学作品として受容されたのか（あるいは拒絶されたのか）、あるいは思想的乃至は政治的な基準で受容されたのか（あるいは拒絶されたのか）の間には、大きな意味の違いがある。特にこのようなテキストの場合、もちろんこの二つの異なる基準のどちらか一方だけに重心を置いて読むことはできないのだが、それでもこれを文学として読んだ場合と、党派的テキストとして読んだ場合とでは、まったく違った評価が下される可能性がある。現実には、このテキストは圧倒的に後者の読まれ方をして、拒否されたのかもしれない。それにも拘らず、文学的評価はまた別に下されなければならないのである。

それは、すでに述べたとおり、少なくとも作家自身はこのテキストを文学的創作の一つとして発表したと解釈すれば、なおさらである。つまり、文学作品が現実と関わりながらも、その現実に対して如何に自律性を保ち、その現実（譬え即効性がないにしても）如何なる作用を及ぼすことができるのかという、文学に宿命づけられた根源的な課題に対する評価である。（2006年度のハイネ賞の授与を決定した審査員たちは、ハントケの作品にまさに現実世界への有効な文学的作用を認めたのであり、後にその解釈が世間一般から政治的（あるいは党派的）な意味において猛烈に非難されたのである。ちなみに、公表された授賞理由は次のとおりである：「ハインリッヒ・ハイネのように頑なに、ペーター・ハントケは自らの作品のなかで開かれた真実への道を辿っている。公の見解やその儀礼に対して遠慮することなしに、ハントケは詩的な眼差しを世界に向けている」³⁾。）

現実世界に対して文学は有効であるか否かという根源的な問いに答える力を筆者は持ちあわせてはいないが、ハントケが作家としてつねにこの問題と対峙し、作品を発表しつづけていることは間違いない。

“Die Tablas von Daimiel”に文学的評価を下すには、そもそもなぜハントケが、あのあまりにも大きな歴史的事象（あるいは事件）に関して所謂「証言の書」を書き、発表したのかを考えなければならない。

ミロシェヴィッチ旧ユーゴスラヴィア連邦元大統領訪問のきっかけは、ハントケが同被告の弁護側証人の一人としてノミネートされたことにある。結果的にハントケは証人として出廷することを断るが、弁護団の要請に応じてスヘフェニンゲンの刑務所にミロシェヴィッチを訪ねたのである。それからおよそ半年後、ハントケは文字通りの司法的証人として証言する代わりに、自らが見たことをあくまでも文学的に表現することを選択し、“Die Tablas von Daimiel”と題するテキストを書き始める。

ハントケが本書で書いていることは、主に次の諸点についてである。一つはICTY（International Crime Tribunal for the Former Yugoslavia）と呼ばれる裁判が、事実審理に基づかず、勝者、つまりNATO諸国の政治権力と結びついた無効な裁判であるということ。

一つはミロシェヴィッチが、1987年と1989年当時、大統領としてコソヴォの少数民族住民であるセルビア人をまえにして行った演説の、「今後は、誰にもあなたたちを打ちのめさせない！」と「今日、わたしたちには新たな戦いが迫っている」という二つのキーセンテンスに対して、西側メディアが1991年の内戦勃発の前と後とではまったく異なった論調のコメントを加えていたということ。つまり、内戦勃発以前はあまり大きな意味をもたなかったこ

の二つのキーセンテンスを、内戦勃発後は西側メディアがミロシェヴィッチ首謀者説を根拠づける決定的な状況証拠に仕立て上げたということ。

一つは、1995年ボスニアのスレブレニツァで起きた虐殺事件には、次のような前史があったことを、スレブレニツァのセルビア人が重い口を開いてハントケに告白したこと。

ナセル・オリッチという司令官に率いられたイスラム教徒たちが、村という村を計画的に破壊したのです。わたしたちセルビア人は、すでに1992年5月にはスレブレニツァから逃げました。(中略) われわれが組織化したのは、1993年1月にクラヴィツァの村が襲撃された後のことです。この村もこの地方の他のすべての村同様に無防備だったから、オリッチの仲間たちは難なくクラヴィツァを占領し、何百というほとんどすべての住民を殺したのです。その後、1月16日が過ぎてから、われわれはスルブスカ共和国の兵士として自分たちを組織化しました。JNA(ユーゴスラヴィア国民軍)はわたしたちと一緒にではありませんでした。われわれは已むに已まれず組織化し、はじめて軍隊を立ち上げたのです。(S. 50)

さらにもう一つは、内戦終結後、セルビアの至る所にクロアチアやボスニア、それにコソヴォの故郷を追われたセルビア人難民が、安ホテルを「まるで終着駅のようにして」、「何の将来展望もなしに」(S. 54) 生きることを余儀なくされていること等々である。

以上のように、ハントケはミロシェヴィッチの獄中の様子のほかに、1995年以降何回となく訪れたセルビアやコソヴォの地で見聞した、言わばセルビア人の生活の「重要なディテール(details significatifs)」(S. 46) を様々に報告している。要するに、ハントケが表現したいことは、ユーゴスラヴィア内戦とその状況下で起こった様々な虐殺事件の責任と罪は、ひとりセルビア人だけにあるわけではないということである。

ハントケは、ミロシェヴィッチをはじめとするセルビア人がいかなる虐殺事件にも関わりがなかったなどとは、一度も書いていない。彼らの関与を認めたくて、ただすべてをセルビア人が始めたわけではなく、より複雑な現実的脈絡があったということを指摘しているのである。そして、それについても自分が書かなければ、世界で誰一人としてセルビア人の真の状況を書く人間はいないという思いが、ハントケに「セルビア擁護の書」を書かせているのは間違いない。そもそも、文学的のみならずハントケが護りたかったのは多民族から成るユーゴスラヴィアであって、単一民族国家としてのセルビアではない。その意味でハントケを「親セルビアの作家」と名づけるのは、本来誤りである。ハントケが護ろうとしたのは、19世紀に興り20世紀に肥大化した民族国家の理念ではなく、民族や宗教が異なる人々が共存する「可能性としてのヨーロッパ」¹⁴⁾の象徴としてのユーゴスラヴィアだったからだ。

この意味において、多民族国家としてのユーゴスラヴィアの分裂と破壊の責任は西側世界にあるという見解が、先に述べた通り、ユーゴスラヴィア問題に関するハントケの作品の基調を成している。NATOに結集する西側世界の罪について、ハントケは次のように述べている。

ユーゴスラヴィアが何かでありえたかもしれないのに、そのことについて西側世界は

何もわかっていない。彼らにこそ、大きな罪があるのです。(中略)そしてこの大罪人が、今や自由を唱える高官、あるいは和平調停者として陽気かつ軽やかに逃げ去ってしまう。その一方では、戦争に駆り立てられる以外になかった悲劇的な人間たちが、罪人としてここに立たされているのにです。なぜなら、今日ではどこかの誰かを公然と罰しなくてはならないからです。(中略)しかし誰に、人を罰するなどという大それたことができるのでしょうか。彼の大悪党が、せっぱつまってならず者になったあの悲劇の小悪党たちを裁いているのです。それは、わたしには耐えがたいことです¹⁵⁾。

「大悪党」とはNATOを形成する所謂西側世界であり、「小悪党」とはセルビア人である、とハントケが考えていることは明らかである。その思いは、1999年3月24日に決定的となったと思われる。

誰もが、9月11日は魔術的な日付であると言う。ではわたしはこう言いましょう。それでは、3月24日は何だったのか? と・・・何ということでしょう、1999年3月24日ヨーロッパの真ん中で、独立した主権国家が何ら法的根拠もなしに、恐ろしい爆弾によって攻撃されたことを誰も知らないとは。これこれしかじかの数の人々が、いえ今ここで数字を並べることはよししましょう。ただ、市民や子供がまったく無益に死んだにも拘らずです。1999年3月24日に何があったのか?¹⁶⁾

こうしたハントケの思いと、さまざまな問題を孕んだNATOのセルビア空爆にも拘らず、「Die Tablas von Daimiel」の報告が客観的事実として真実を伝えているかどうかをここで検討する材料を、読者であるわれわれは持ち合わせていない。その意味で、ハントケの作品を文学としてではなく、あくまでも事実探求のテキストとして読んだとしたら、ペーター・ヤミンの次の指摘は否定しようがない。

ハントケは詩人に留まる代わりに、ジャーナリストの領域に踏み込まなければならなかったのに、そうしなかった。ときとしてハントケが議論のなかで重視していること、つまりジャーナリストの言語か詩人の言語かということは本質的なことではない。重要なのは調査であり、ハントケは感じる代わりに、叙述すべきだった。また、観察する代わりに、事実を挙げるべきだった。

(中略) ペーター・ハントケは、ユーゴスラヴィア戦争とその結果、さらにはその犠牲者について重要な本を書いた。それらは読まれなければならない。(中略)しかし、ハントケは自身の著書によって読者を啓蒙することはせず、ただ混乱させ、あまたの未回答の疑問とともに置き去りにしていること一つを取っても、ハイネ賞には適格でない¹⁷⁾。

しかしわたしたち読者は、そもそもハントケ自身、自らの見聞と所感を所謂司法的証言、あるいは表層的な事実関係を解説するテキストとして提示しようとしていたわけでないということを思い起こさなければならない。もしハントケが自らの証言に司法的効力を認めてい

たとしたら、仮に ICTY の正当性を疑っていても、弁護側証人として証言台に立っていたはずである。ハントケにとって重要なのは、何を表現するかということ以上に、それを如何に表現するかということなのではないか。それによって、既成のジャーナリズムや法廷がその重要性を認めようとしないディテールに光をあて、現実のなかに隠されている個々の真実への入り口を読者に示すことが作家の役割である、とハントケは考えているようにみえる。

セルビア人難民の若い絵描きについての描写を以て、ミロシェヴィッチを含むセルビア人に関する叙述を終えるところ、つまり突如スペインのダイミエルの台地の描写に移行する直前に、ハントケは本書執筆の意図と作家としての自らの役割を以下のように明らかにしている。

《裁判は裁判である》というのは、現在のセルビアのエピソードチックな見せかけの権力者たちの一人が言ったことばである。このことばを以て彼は国際裁判を是認し、支援していた。いや、裁判は裁判ではない。そして《証人は証人》か？ いや、証人は証人ではない。証人は証人だと言うなら、わたしは自分のことを回り道の証人と看做す。そして、そんな回り道の証人—それは多分何の意味もないわけではないが、上級法廷にとっては、あるいはそもそも正常な裁判や異常な裁判にとっても、何の意味もないのであろう。それは逆に、そんな裁判が回り道の証人にとって何の意味もないように。(S. 60)

「回り道の証人 (Umwegzeuge)」は、いつものように勿論ハントケの造語である。ここに至って、この作品に付された“Ein Umwegzeugenbericht zum Prozeß gegen Slobodan Milošević (スロボダン・ミロシェヴィッチに対する裁判のための回り道の証人の報告)”という奇妙な副題の意味がようやく諒解される。

これまでの多くの作品と同様に、ハントケはタイトルに自らの文学的意図の核心を忍び込ませているのである。しかも、それはすぐには読者の腑に落ちないことばや表現の意匠を凝らすことによって、言わば、最小限の言語形式による文学的な「異化効果」を発揮する。例えば“Wunschloses Unglück”というタイトルが、通常の文法的な言語使用とは矛盾するハントケ固有の言語形式として自己主張するのと同様に¹⁸⁾、この「回り道の証人」という造語もことばの異化を通して、ICTY は正当であるという“自明性”、及び「ユーゴスラヴィアとセルビアのすべてを知っている」と思い込んでいる「所謂世界」¹⁹⁾の“自明性”に疑問符を付しているのである。

以上のように、ハントケはミロシェヴィッチ及びその裁判という現実的な政治との関わりにおいても、あくまでも文学的言語表現の領域を去ろうとはしない。なぜなら、ハントケは自らの文学的「証言」が ICTY のような法廷では如何なる有効性も持たないこと、そして文学的言語が有効でない領域は真実からほど遠いということを確認しているからである。

おわりに：文学的言語の有効性

ハントケは、ユーゴスラヴィア内戦下で犯されたさまざまな犯罪行為を裁くことの必要性を否定はしていない。ただ以下の発言からわかる通り、犯罪行為の言わば一方の当事者による裁判では、真実に基づいて裁くことは不可能であると考えているのである。

（前略）なぜなら、この裁判は不条理だからです。彼らはすぐに裁判をやめるべきです。もちろん、裁きは下されなければならない。罪が追及されなければならないことは、わたしだってよくわかっています。しかし、あまりにも多くの罪が存在し、あまりにも多様な罪や、根本的な原因を作った罪もあるのです。あそこで訴追された被告たちは、根本原因を作った罪人ではありません。ある意味で、彼らが起訴されたのは正当でしょう。しかし、どこで？ そして、誰によって？ いずれにしても、あそこで告訴した者たちは、公正な原告ではありません。そして、あそこで起訴された者たちは、根本原因を作った罪人ではないのです。彼らに罪があったにしても、根本原因を作った罪人はどこかほかにいるのです²⁰⁾。

真実を明らかにできるのは、「大罪人」²¹⁾自身が原告であるような裁判ではなく、旧ユーゴスラヴィアやセルビアの日常で起こったディテールを叙述する文学しかない。たとえ、それが「回り道」であったにしても。これがハントケの文学的確信である。

ハントケはこの文学的確信に基づいて、「真実」を知っていると思いこんでいる「所謂世界」の「真実でないばかりか、破廉恥でさえある言語」²²⁾に対抗するために、ミロシェヴィッチの葬儀に参列し、本稿の冒頭に引用した彼の弔辞を述べたのである。

（前略）あのような言語が、わたしにボザレヴァッツでの短い弔辞を述べるきっかけを作った。（中略）それが、わたしに別の言語を聴き取ることを強いた。それはスロボダン・ミロシェヴィッチへの忠誠からなどではなく、まさに彼の別の言語、つまりジャーナリズムの支配的言語ではない言語への忠誠からだった²³⁾。

「彼の別の言語」とは、勿論文学的言語を意味している。ハントケが言う「所謂世界」が見ようともせず、また耳を傾けようともしない日常のセルビアの人々の姿と声を伝えうるのは偏に文学的言語であり、そのみが生の真実を叙述しようとハントケは考えていると言える。ハントケが叙述しようとするのは、歴史に名を刻む事象や人間の姿ではなく、歴史にとっては取るに足らないもののようであるが、しかし現に在る人間の物語であり、そこに隠されている真実である。だから、「わたしは真実を知らない。しかし、わたしは見、聴き、感じ、想起し、そして尋ねます」というように、ハントケは真実を提示しようとするのではなく、真実を包摂する物語を見つけようとしてきたのである。

こうしたハントケの文学的意図は、作家の真意であろう。それは、ユーゴスラヴィア内戦の勃発を契機にして、それまで避けていた歴史的要素を自らの創作に取り込まざるをえなくなった1991年以降の作品においても変わらない。

しかし、であればなおのこと、何故ハントケがミロシェヴィッチという明らかに歴史に残る党派の人間への近さを表明したのであろうか、という疑問はより大きくなる。これまで見てきた通り、“Die Tablas von Daimiel”でのミロシェヴィッチについての叙述は文学的範囲で解釈することが可能であるが、その葬儀に参列し弔辞まで述べた事実を（仮令その「近さ」はあくまでも個人的なものであり、またミロシェヴィッチも彼の「小悪党」の一人にすぎないと作家自身が考えているにしても）、文学的にどのように解釈すべきなのか（あるいは、文学的文脈とは一切関わりがないと考えることが許されるのか）については、ここに至っても未だに明快な答えが見つからない。

「>アンガジュマン<という概念は政治的である。ハントケが書くものは、まさにそれである。狭い意味においてはまったく>政治的<であるが、ただ>政治活動的<ではない」²⁴⁾という70年代後半に下された評価が正鵠を射ている通り、ハントケの文学は創作年代に依じてその表現形式を変化させてきたにも拘らず、一貫して明瞭な政治意識を内包していたと言える。この「政治的であること」と「政治活動的であること」との間にある一線を踏み越えないところに、ハントケ文学がその文学性、つまり普遍性への可能性を秘めていたと言ったら言いすぎであろうか。少なくともハントケ自身は、そのことを以下のようにすでに60年代後半の創作活動の初期に意識化している。

ヒトラー、アウシュヴィッツ、リュプケ、ベルリン、ジョンソンあるいはナバーム弾といったことばは、わたしにとってはすでに意味を込められすぎたことばであり、政治的でありすぎる。その結果、わたしはそれらのものをことばとして、文学的に予断を持つことなしに使うことができない。そうしたことばを文学的なテキストのなかで読んだとしたら、それがどのような脈絡にあらうと、わたしにとっては何の作用ももたらさず、ただ腹立たしいものになって、わたしに考えることを喚起すること、呼び覚ますこともないであろう²⁵⁾。

しかるに、ユーゴスラヴィア内戦勃発を契機にして、1996年になるとハントケがそれまで自身の文学にとって「恐ろしいもの」であり「ずっと拒絶してきたもの」、つまり「歴史」を作品に持ち込んだことはすでに紹介した通りである。とは言え、それは非常に抑制の利いた形で「歴史」との関与であった。作品に登場する実在のものは、あくまでも名もなき市民や、世界から忘れられた町や村の風景や自然、あるいは川などであった。内戦時にボスニアのスレブレニッツァで犯された虐殺事件に言及する条も、同様にかなり抑制の利いた調子を崩していない。（そのため、ヨーロッパのメディアや多くの言論人から、ハントケはセルビア人に都合の悪いスレブレニッツァの虐殺事件の事実を意図的に無視しているなどと、謂れなき非難を浴びせられた程である。）それは、ハントケが「わたしはそもそもジャーナリストとして書くことはできない」²⁶⁾という意識の下、あくまでも文学的なテキストを書こうという意志の現れであった。ハントケは「それは恐ろしいくらいの滞りだった」と述べるくらい、自分がそもそもユーゴスラヴィアやセルビアについて書く「正統性」^{レガティミテート}を持っているのかどうかさえ確信が持てず、「四年半ものあいだそのテーマについて考え、いつ書き始め

るのがもっともよいか、何を、そしてどのように言うことができるのかについて自問した」²⁷⁾程であった。こうした長い自問への答えが、文学としてジャーナリズムとは異なる「具体的であり、同時に解放する力を持った別の何かを書くという衝動だった」²⁸⁾。

以上のように、現実の政治的要素に対する文学的指向の優位性は、所謂ユーゴスラヴィア問題に関わる作品でも最終的な一線において揺るぎないもののように思えた。しかし、ハントケの創作におけるその文学の優位性を揺り動かすものは、本稿で見てきた通りミロシェヴィッチという「歴史的人物」を自らの作品に登場させたことであり、さらにはその傍らで弔辞を述べたという事実である。本稿ですでに繰り返し触れてきたように、ハントケの文学への意思是疑うべくもないが、ミロシェヴィッチという歴史的かつ党派の名称がハントケのユーゴスラヴィアに関わる作品およびその創作態度に落とす影は、簡単に無視できるものではない。

これを以て、これまで書かれ、さらにこれから書かれるであろうハントケの作品のすべてが、作家自身が目指す現実に対する文学の自律性を喪失するとは言えないのかもしれない。また、葬儀への参列も含め、自らの文学世界にミロシェヴィッチを登場させたことは、作家ハントケの人間および創作者としての「混乱」であり、修正の利く誤りであったと理解してもよいのかもしれない。事実ハントケは、NATOによるセルビア空爆のときベオグラードのテレビによるインタビューのなかで、現代のユーゴスラヴィア問題と関連づけながら第二次世界大戦時にナチス・ドイツの手先となったウスタシャ・クロアチア人がヤセノヴァッツ収容所等²⁹⁾で多数のセルビア人を虐殺した事実を引いて、「セルビア人はユダヤ人よりも多大な犠牲をはらった」と答えてしまった自らの過ちを、次のように大いに後悔し、撤回している：「後にドイツのメディアにその発言について問いただされたとき、わたしはあのような愚かなことを実際に発言してしまったことが自分でも信じられなかった」。それは、NATOの空爆という「苦しみのなかで、頭が混乱してしまっていた」³⁰⁾（傍点は引用者による）ためだったというわけである。

とは言え、ミロシェヴィッチの葬儀への参列が、この発言の誤りに気づいた後のことだったことを考えれば、それが単なる「混乱」のなかで起こってしまったことと理解することはできない。

事程左様に、ミロシェヴィッチへの関与が作家ハントケおよびハントケ文学にとって如何なる意味を持つのかを、明快に判定するのは非常に難しい。それは、ひとりの作家の日常における文学的言動³¹⁾が現実の党派的事象に関与したとしても、それとは関わりなく、作品世界の文学的価値は不変であると判断できるかどうかという問いの難しさを意味している。

「(前略) 悪霊を追い払え。いいかげんに、彼の言語を捨てよ。問いかける芸術を学ぼうではないか。ユーゴスラヴィアという名の、そして別のヨーロッパという名を冠した、あの声のよく響く国へ旅立とう。蘇れよ、ヨーロッパ。蘇れよ、ユーゴスラヴィア。Živela Jugoslavija」³²⁾というハントケのことは、ユーゴスラヴィア問題に関する作品群が、民族の壁を乗り越えた、新たな「寛容と人権のヨーロッパ」という高い理想を文学的に表象しようとしていることを示している。その理想を掲げることができるのは、ユーゴスラヴィア問題をステレオタイプ的に白か黒かの単純な二元論で判断することしか知らないメディアの言語ではなく、隠されたディテールを掘り起こす可能性をもつ文学の言語しかない。つまり、真実

と理想に近づく道は、仮令それが「回り道」であっても、文学的言語のなかにしか発見できない、というハントケの確信は否定されようがない。なぜなら、文学および芸術こそが、そのときそこに限定されながらも、しかし確かに存在する（あるいは存在した）アノニウムな人間の姿や自然の描写を通して、歴史に埋もれてしまう一回限りの生の営みの重みと真実に光を照射することができるからだ。

それにも拘らず同時に、その文学的言語（作品のみならず葬儀での弔辞も含む）のなかに初めてミロシェヴィッチという歴史的人物をあえて登場させたことが、喉元に刺さった小骨のような不快感をもたらすのも事実である。これがハントケの文学にとって例外的なものに留まるのか否か？ それを判断するには、その後の作品の表現形式を見極めなければならないことだけは確かである。

注

作品からの引用は、その直後に頁を示した。使用テキスト：“Die Tablas von Daimiel. Ein Umwegzeugenbericht zum Prozeß gegen Slobodan Milošević”, Suhrkamp, 2005

- 1) FOCUS, 27. März 2006
- 2) 96年1月に「南ドイツ新聞」に発表された“Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien”と“Sommerlicher Nachtrag zu einer winterlichen Reise”を指す。
- 3) 拙論参照：文学的理想としてのユーゴスラヴィア、ペーター・ハントケの“Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien”と“Abschied des Träumers vom Neunten Land”についての考察、東北ドイツ文学研究第45号、2001年
- 4) 前掲論文参照
- 5) Peter Handke/Peter Hamm: “Es leben die Illusionen, Gespräche in Chaville und anderswo”, Wallstein Verlag, 2006, S. 172
- 6) “Nackter, blinder, blöder Wahnsinn. Peter Handke im Gespräch mit Wolfgang Reiter und Christian Seiler”, in: Noch einmal für Jugoslawien: Peter Handke”, hrsg. von Thomas Deichmann, suhrkamp taschenbuch, 1999, S. 155
- 7) “Vielleicht bin ich ein Gerechtigkeitsidiot. Peter Handke im Gespräch mit dem Kriegsreporter Gabriel Grüner”, in: “Noch einmal für Jugoslawien: Peter Handke”, S. 110. ハントケは「歴史に巻き込まれた」ことに、「大いに満足している」とも述べている。
- 8) Lothar Baier: “Krieg im Kopf. Aufregung um Peter Handkes Reisebericht aus Serbien”, in: “Noch einmal für Jugoslawien: Peter Handke”, S. 36
- 9) Peter Handke: “Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien”, suhrkamp taschenbuch, 1998, S. 77
- 10) 原文の“Umwegzeugenbericht”は、明らかにハントケの造語である。“Umweg”は「回り道」を意味するので、直訳すれば「回り道の証人」あるいは「回り道をする証人」となり、裁判の争点の核心には直接関わらないが、その背景として重要な意味をもつ出来事についての証人といった意味をもつ。「回り道の証人」は日本語としてあまりにも不自然だが、ドイツ語においても決して自然な表現とは考えられず、まただからこそ文学的表現としての意味を獲得するものであるため、「間接的証人」などと意訳せず、直訳的な日本語を選択した。
- 11) “Die Serben sind heute automatisch als die Schuldigen, und Fragen werden nicht gestellt. Peter Handke im Gespräch mit Bru Rovira”, in: “Noch einmal für Jugoslawien: Peter Handke”, S. 201
- 12) ibid. S. 201
- 13) Peter Jamin: “Der Handke-Skandal. Wie die Debatte um den Heinrich-Heine-Preis unsere Kultur-Gesellschaft entblößte”, GARDEZ! VERLAG, 2006, S. 38
- 14) Peter Handke/Peter Hamm: “Es leben die Illusionen, Gespräche in Chaville und anderswo”, S. 171
- 15) ibid. S. 173
- 16) ibid. S. 173
- 17) Peter Jamin. S. 100
- 18) 拙論参照：ペーター・ハントケの作品における「言語表現」と「言語喪失」との関係についての考察—

“Wunschloses Unglück”の言語表現を手掛かりにして一、秋田大学教育文化学部研究紀要、人文・社会科学第59集、2004年3月

- 19) ミロシェヴィッチの葬儀に列席したハントケは、弔辞の中で次のように述べている：「世界、そう所謂世界はユーゴスラヴィアとセルビアについてすべてを知っている。世界、そう所謂世界はスロボダン・ミロシェヴィッチについてすべてを知っている。所謂世界は真実を知っている。（中略）所謂世界は世界ではない。わたしは、自分が知らないということを知っている（後略）」。
- 20) Peter Handke/Peter Hamm: S. 175
- 21) *ibid.*, S. 175
- 22) Peter Handke: “Ich wollte Zeuge sein”, aus FOCUS, 27. März 2006, und auch “Am Ende ist fast nichts mehr zu verstehen”, in: “Meine Ortstafeln, Meine Zeittafeln, 1967-2007”, Suhrkamp, 2007, S. 512
- 23) *ibid.*
- 24) Heinz F. Schafroth: “Von der begriffsauflösenden und damit zukunfts mächtigen Kraft des poetischen Denkens. Peter Handke, sein Elfenbeinturm und die Wörter >politisch<, >engagiert<, >poetisch<.”, in: TEXT + KRITIK 24/24a PETER HANDKE, 1978, S. 71
- 25) Peter Handke: “Ich bin ein Bewohner des Elfenbeinturms”, suhrkamp taschenbuch, siebte Auflage, 1981, S. 25
- 26) “Vielleicht bin ich ein Gerechtigkeitsidiot”, S. 107
- 27) *ibid.* S. 107
- 28) *ibid.* S. 107
- 29) 第二次世界大戦当時、ナチの援助を受けたパベリッチの下でユーゴスラヴィア王国から独立したウスタシャ・クロアチアは、ヤセノヴァッツ収容所等を建設して、数十万人のセルビア人を虐殺した。
- 30) Peter Handke: “Am Ende ist fast nichts mehr zu verstehen”, S. 511
- 31) 自らの作家活動の初めから2007年に至るまでの主なエッセーを収録したエッセー集“Meine Ortstafeln, Meine Zeittafeln 1967-2007”に、ミロシェヴィッチの葬儀に参列し、弔辞を述べたことに関するコメントも載せている事実を見ると、ハントケ自身が当該の言動を文学的なコンテクストに位置づけていると理解することは誤りではないと言える。
- 32) Peter Handke: “Am Ende ist fast nichts mehr zu verstehen”, S. 512